(一社)地域環境資源センター(JARUS)設立40周年記念事業

令和５年度 田園自然再生活動の集い

「生物多様性と田園自然再生活動 ―生きものと共にある田園自然の暮らしと営みの継承―」

開催報告

令和５年１２月１３日、東京大学弥生講堂一条ホールで「生物多様性と田園自然再生活動 ―生きものと共にある田園自然の暮らしと営みの継承―」をテーマに、「田園自然再生活動の集い」を対面とオンライン配信とのハイブリッド方式で開催しました。今回は(一社)地域環境資源センター(JARUS)設立40周年記念事業の一環として実施しました。

オンライン視聴も含め、田園自然再生活動に携わる活動団体や行政職員、農業関係者、大学関係者など２００名を超える参加者が熱心に耳を傾けました。

１．開催目的

農村では、農業の営みを通じて田んぼや水路、ため池などにさまざまな生きものが育まれ、自然豊かな環境が作り上げられてきました。そして、こうした農業・農村のもつ豊かな自然環境の保全・再生を図るため、地域が一体となって取り組んでいるのが「田園自然再生活動」です。

農家の高齢化や減少に伴い、こうした活動や活動団体の脆弱化が懸念される中、「田園自然再生活動」によって育まれてきた自然、文化、そして地域社会がより良いものになるよう、改めてこれら活動団体の体制を確立し、着実に活動していく必要があります。

このため、「田園自然再生活動協議会」の会員をはじめ、農業者、行政機関、環境保全活動NPO、多面的機能活動組織、学校関係者の参加のもと、相互に情報交換や意識啓発を図り、田園自然再生活動の継続・充実や拡大を図ることを目的に、「田園自然再生活動の集い」を開催するものです。

今回は、「生物多様性と田園自然再生活動 ―生きものと共にある田園自然の暮らしと営みの継承―」をテーマとして、農村環境の豊かな自然、文化、そして私たちの暮らしについて改めて見つめ直し、これからの田園自然再生活動の可能性について考えます。

２．開催概要

銀杏が美しい
東大弥生講堂一条ホール

- 開 催 日： 令和５年１２月１３日（水） １３：００～１７：００
- 開催場所： 東京大学弥生講堂一条ホール ※オンライン配信併用
- 主 催： (一社)地域環境資源センター、田園自然再生活動協議会
- 後 援： 農林水産省、環境省、
  全国農村振興技術連盟、(公社)農業農村工学会、
  農村計画学会、棚田学会、(一財)日本グラウンドワーク協会
- 参加人数： ２１４名
- プログラム：
  (1)主催者挨拶 （一社）地域環境資源センター理事長 林田直樹
  (2)来賓挨拶 農林水産省農村振興局整備部長 緒方和之
  環境省自然環境局自然環境計画課長 則久雅司
  (3)基調講演 中村桂子（JT 生命誌研究館 名誉館長・田園自然再生活動協議会 会長）
  「私たち生きものの中の私 ―田園自然の暮らしこそ未来―」

⑷田園自然再生活動団体アンケートフォローアップ報告　(一社)地域環境資源センター

⑸パネルディスカッション

・コーディネーター：荘林幹太郎（総合地球環境学研究所 特任教授）

・コメンテーター　：中村桂子　（JT 生命誌研究館 名誉館長・田園自然再生活動協議会 会長）
　　　　　　　　　　林田直樹　（地域環境資源センター 理事長）

・パネリスト：　有本　智　（和歌山、NPO 法人自然回復を試みる会ビオトープ孟子）
　　　　　　　　川端小右衛門（福井、水辺と生き物を守る農家と市民の会）
　　　　　　　　上野和美　（福井、水辺と生き物を守る農家と市民の会）
　　　　　　　　小林弘子　（滋賀、栗見出在家町魚のゆりかご水田協議会）

３．プログラム内容

○　開　会

（一社）地域環境資源センターの林田直樹より主催者代表挨拶、その後、農林水産省の緒方整備部長（渡邉計画調整室長 代読）及び環境省自然環境計画課の則久課長からもご挨拶をいただきました。緒方整備部長（渡邉計画調整室長 代読）からは、持続可能な農林水産業の維持・発展のためには生物多様性の保全は不可欠であると述べられ、食料・農業農村基本法の検証作業、緑の食料システム戦略など農水省で取り組まれている各種政策について、また、土地改良事業における環境との調和に配慮した基盤整備の実施や多面的機能支払制度など地域が協働で行う生態系保全の取組に対する支援についてもご紹介いただきました。また、則久自然環境計画課長は、生物多様性条約 COP15 にふれ、2030 年までに生物多様性の損失を食い止め、回復させる（ネイチャーポジティブ）という目標達成に向けて、環境省が進めている政策や取組、急速に広がりをみせる自然保護のあり方に対する国際社会、また経済界のトレンドについてお話しいただきました。生産活動を継続しながら生物多様性を維持してきた日本特有の自然との関わりの中で、田園自然再生活動という取組が今後ますます重要になっていくと強調されました。

（一社）地域環境資源センター
理事長 林田直樹 氏

農林水産省農村振興局
整備部長 緒方 和之 氏
（渡邉計画調整室長 代読）

環境省自然環境局
自然環境計画課長 則久雅司 氏

○　講　演

【基調講演】

「私たち生きものの中の私　－田園自然の暮らしこそ未来－」

JT 生命誌研究館 名誉館長、田園自然再生活動協議会 会長　　中村　桂子 氏

JT生命誌研究館 名誉館長
田園自然再生活動協議会 会長
中村　桂子 氏

中村様は東京都ご出身の理学博士で、人間は生きものということを基本に置く知である「生命誌」を創り出し、これからの生き方を提案されています。

今回は「私たち生きものの中の私-田園自然の暮らしこそ未来-」をテーマとして、田園自然再生活動やその理念を、社会の基本、社会の主流としてさらに広げていくべきであり、この活動が「地域」にとどまらず、地球全体に広がってほしいという、中村様が大切にされている思いやお考えについてご講演いただきました。

○　田園自然再生活動団体アンケートフォローアップ・現地視察報告

田園自然再生活動に関わる取組が始まってから２０年目の節目を迎え、持続的な自然再生や今後の組織運営について考える手がかりとなることを目的に、田園自然再生活動コンクール(H15～H24)の歴代受賞団体及び「集い」で活動報告をしていただいた団体(H27～R4)にこれまでの取組の状況や今後の活動へのお考えについてアンケートを実施して、その結果報告を行いました。また、滋賀県東近江市「栗見出在家町魚のゆりかご水田協議会」の現地視察についても報告しました。

○　パネルディスカッション

「生物多様性と田園自然再生活動 －生きものと共にある田園自然の暮らしと営みの継承－」

３組のパネリストに各地域での活動を発表いただいた後、総合地球環境学研究所の荘林特任教授をコーディネーターとして、中村会長、林田理事長の２名のコメンテーターと水辺と生き物を守る農家と市民の会の川端様を加えた７名でディスカッションが行われました。

【活動発表①】『孟子不動谷における稲作水系復元事業』

NPO 法人自然回復を試みる会・ビオトープ孟子　　有本　智　氏

和歌山県海南市の孟子不動谷での活動報告。

耕作放棄された休耕田を活用した自然再生事業「稲作水系復元事業」と「日本ユネスコ 未来遺産運動」についてご紹介いただきました。放棄水田の「床土」を利用し、川から引き入れた水を循環させて水辺ビオトープ(とんぼ池)を作り、稲作水系に棲む生きものの保全に取り組まれ、水辺ビオトープの豊かな生態系とその重要性についてお話しいただきました。また、「未来遺産運動」を通じて、孟子里山を子供たちの環境教育の場や自然体験の場として有効利用し、子供た

ちに里山の環境や生きものに愛着を持ってもらうことで田園自然を次世代に継承していく取組についてもご紹介いただきました。

NPO法人自然回復を試みる会
ビオトープ孟子
有本　智　氏

【活動発表②】『人も生き物も元気な里地里山』
水辺と生き物を守る農家と市民の会　　上野　和美　氏

福井県越前市の白山・坂口地区での活動報告。

人も生きものも元気な里地里山をめざして、地域が一体となって生きものが暮らす豊かな自然環境を保全し、人間生活との共生を図ることで、農村環境がより良く活性化する様々な取組についてご紹介いただきました。特に「アベサンショウウオ」「メダカ」「コウノトリ」など希少種の保護活動をはじめ、希少野生生物保全技術研修の開催や子供たちへの環境教育プログラム、サギソウの保全活動、外来種の調査などの取組についてもお話しいただきました。近年では、「田んぼファンクラブ事業」や環境にやさしい「コウノトリを呼び戻す農法」などを実施し、コウノトリも住める豊かな文化、地域、環境づくりを目指しています。

水辺と生き物を守る
農家と市民の会
上野 和美　氏

【活動発表③】『生物多様性への取組み　～持続と展開の可能性～』
栗見出在家町魚のゆりかご水田協議会　　小林弘子　氏

滋賀県東近江市栗見出在家町での活動報告。

活動の目的として①かつての田園風景を取り戻す、②安心安全なお米作り、③地域の一体化、④琵琶湖と生き物との共生を通じ、地域への愛着を育むことを掲げ、農家も非農家も一致団結して取り組んでいる栗見出在家町の取組についてご紹介いただきました。滋賀県の「魚のゆりかご水田プロジェクト」の推進役として、水田オーナー制度の導入や田植え・稲刈り体験、生き物観察会などのイベント開催、さらに、魚のゆりかご水田米の米粉や地元食材を使った料理講習会の

開催や学校給食等を通じた食育、県外中学生の教育旅行の受け入れ、地元酒造メーカーと連携した酒米と日本酒造りなど、地域活性化を図る様々な活動について楽しくご紹介いただきました。

栗見出在家町
魚のゆりかご水田協議会
小林 弘子　氏

【パネルディスカッション】

総合地球環境学研究所の荘林特任教授をコーディネーターとして、中村会長、林田理事長の２名のコメンテーターとパネリストとして活動発表をしていただいた３名に川端様を加えた７名でディスカッションが行われました。

・コーディネーター：荘林幹太郎　（総合地球環境学研究所 特任教授）
・コメンテーター　：中村桂子　（JT 生命誌研究館 名誉館長・田園自然再生活動協議会 会長）
　　林田直樹　（地域環境資源センター 理事長）
・パネリスト：　有本　智　（和歌山・NPO 法人自然回復を試みる会ビオトープ孟子）
　　川端小右衛門（福井・水辺と生き物を守る農家と市民の会）
　　上野和美　（福井・水辺と生き物を守る農家と市民の会）
　　小林弘子　（滋賀・栗見出在家町魚のゆりかご水田協議会）

総合地球環境学研究所 特任教授
荘林幹太郎 氏

パネルディスカッションでは、総合地球環境学研究所の荘林特任教授の進行で、中村氏の基調講演で強調された「私たち生きものの中の私」「生物多様性」という観点から、今の社会や活動をどうとらえているのか、自然とどう付き合うべきか、各パネリストがそれぞれの立場から身近な体験談も交えて思いを語っていただき、活動を継承・継続していくことの意義と今後の方向性について活発な議論が交わされました。

総括のコメントとして、林田氏は「政府は近年、かつてなく生物多様性の保全に本気で取り組む姿勢を見せているが、大事なのは現場での実行であり、それを 20 年後、30 年後も続けられる仕組

みづくりが求められる。また、土地改良事業は 20 年以上前から環境への配慮を重視してきたが、ここで改めて原点に立ち戻り、生物多様性、生態系サービス供給の重要性を考える必要がある」。中村氏は「今日発表された皆様は、これまでもご苦労があった中、本当に楽しそうに活動をされ、『幸せになれた』と言われている。これから世の中全体がもっと厳しい状況になると思うが、生きものとしての喜びがどこにあるかを考えれば、この先も必ず皆様と同じような方が次々と出てきて活躍されているはずであり、このような活動がなくなることはないと信じている」。最後に荘林氏は「最近、ある農家の方から『土や自然や生きものを相手に農業をすることは、不確実性はあるが、不確実性と懸命に向き合いながら自分の才覚を発揮する方が、人生としてははるかに楽しい』と言われて、非常に感心した。これからは、そういう農業を支えられる政策のあり方や役割がきわめて重要になってくるはず」と、それぞれが田園自然再生活動の今後に熱い期待の言葉を寄せ、催しの幕を閉じました。

荘林幹太郎 氏

中村桂子 氏

林田直樹 氏

有本 智 氏

小林弘子　氏

川端小右衛門 氏

上野和美 氏